

論文審査の結果の要旨

氏名：七海 絵里香

博士の専攻分野の名称：博士（生物資源科学）

論文題名：文化的景観を形成する人と植物の関係に関する緑地学的研究

審査委員：(主査) 教授 糸長 浩司
(副査) 教授 長谷川 功 教授 古川 安
非常勤講師 勝野 武彦

人と自然と関係性で形成されてきた地域の文化的景観の保全・再形成は、地域特性に応じた植物や土地の賢明な利用を基礎としつつ、総体として多様性が確保されることによる社会全体の健全性を維持・増幅する上で重要である。しかし、特に中山間域の人口減少と人間活動の縮小や大規模合理化された農業の敷衍により、伝統的な農的管理や生物資源利用によって維持されてきた文化的景観は、現在減少傾向にある。

本論文の一章では、利用・観賞・管理されてきた植物に注目し、研究事例とした対象植物や文化的景観を通じて、その生育環境および人間との関わりの歴史や土地利用等を調査することで、文化的景観の再評価や創出の可能性を検討するという、本論文の目的と意義を述べている。

第二章では万葉～平安期の和歌集の和歌に歌われている植物に対する人間の行為の把握と秋の七草の生育立地の把握、および適度に人の管理が入る栃木県茂木町の谷津田域における植生調査により、古来から植物資源の利用や鑑賞などを通しての人と植物の多様な関わりを明らかとし、それら植物資源利用に伴う適度な人間による植生管理により遷移が抑えられ、「野」が身近に広く存在してきた可能性を示している。これは、万葉集において「野」の立地に生育する秋の七草を読んだ歌が秋の七草を詠んだ全歌数（229件）の49.7%を占めていたことや、谷津田域における萩の生育立地が適度な人の干渉が入る裾刈り草地という半自然草地に限定していたことから明らかにしたものである。そして、「野」のような半自然草地は人々に親しまれてきた日常的空間であり、季節感や生物多様性を認知する空間として価値があることを明らかにしている。しかし、現在、資源としての植物の活用の減少や利用者の高齢化等に伴い、この「野」の景観は、減少傾向にあり、今後は「野」の文化的な側面に着目した新たな価値認識により、このような野の草花の生育する場を文化的景観として保全することの必要性を指摘している。

第三章では、現代の代表的な植物資源利用に伴う文化的景観の事例として、伊豆半島松崎町における桜葉畑、八溝山地南部域における漆掻き林、和歌山県みなべ町における梅林を取り上げている。松崎町の桜葉畑景観における在来種オオシマザクラの高い萌芽能という特性を活かした栽培法の確立とその歴史性、農地保全と有機質資源の地域内循環との繋がり、八溝山地南部域の漆掻き林における伝統的立地及び林床管理による生物多様性との繋がり、みなべ町の梅林における梅栽培の歴史性と立地特性を活かした景観の秀美性等、それぞれの地域景観に付随する機能や性質を有していることを明らかにしている。桜葉畑は町内に約6.5ha、漆掻き林は30km×20kmの範囲に約200地点あり、人の営みを感じさせる景観として地域内に点在していたが、これら栽培植物の生育空間も栽培・管理の担い手不足により、その分布の減少や農村の脆弱化に伴う栽培・管理の変化によりその存在形態の変化が起こっている。このことから、植物資源利用型で農的な文化的景観の維持・形成には、地域景

観に付随する機能や性質をいかに保持、再形成するかが課題であるとし、その検討については地域ごとに景観の成立過程や生態的意義等、様々な視点から考慮すべきであることを明らかにしている。また一方で、みなべ町が観梅の名所として確立した事例から、地域景観の文化的価値を地域住民が理解し、その意義を広く啓発することは地域活性に繋がる可能性のあることも指摘している。

第四章では、人との関わりを持つ「野」の景観としての普遍的性質を有している畦畔植生の移植実験を行い、「野」の景観の復元・創出の可能性を実証した。実験では、移植表土の土壌の厚さや攪拌条件を変えることで、より有効な移植手法や注意点を明らかにしている。その結果、採取表土の深さによる種数や植比率の差がほとんどない一方で、安定した植生を早期に形成するためには、攪拌せず、マット状のままの移植が有効であることを明らかにし、また、各条件区での帰化率が平均で 6.8～12.7%と全体的に低い値であったことから、良質な半自然草地の要素が移植表土に含まれることの重要性を明らかにしている。

第五章のまとめでは、かつては経済的価値が認められ、植物を資源として利用されることで管理・維持されてきた緑地空間は、現在減少傾向にあることを指摘し、その時流において植生景観を「文化的」という視点で評価し、保全・創出を図ることに意義があることを明らかにしている。その上で、「野」のような文化的景観を創出する技術的な研究の進展が求められていること、それに加えて様々な特性や機能を持った文化的景観が身の周りについて、地域の人々の価値認識を新たにすることや、その意義の啓発を広く行うが文化的景観の維持・形成において重要な課題であることを明らかにしている。

本論文は、文化的景観の意義とその価値およびその保全と再形成について、緑地学的視点から詳細な文献調査と現地調査により明らかにしている論文として評価できる。

よって本論文は、博士（生物資源科学）の学位を授与されるに値するものと認める。

以 上

平成 27年 2月 3日